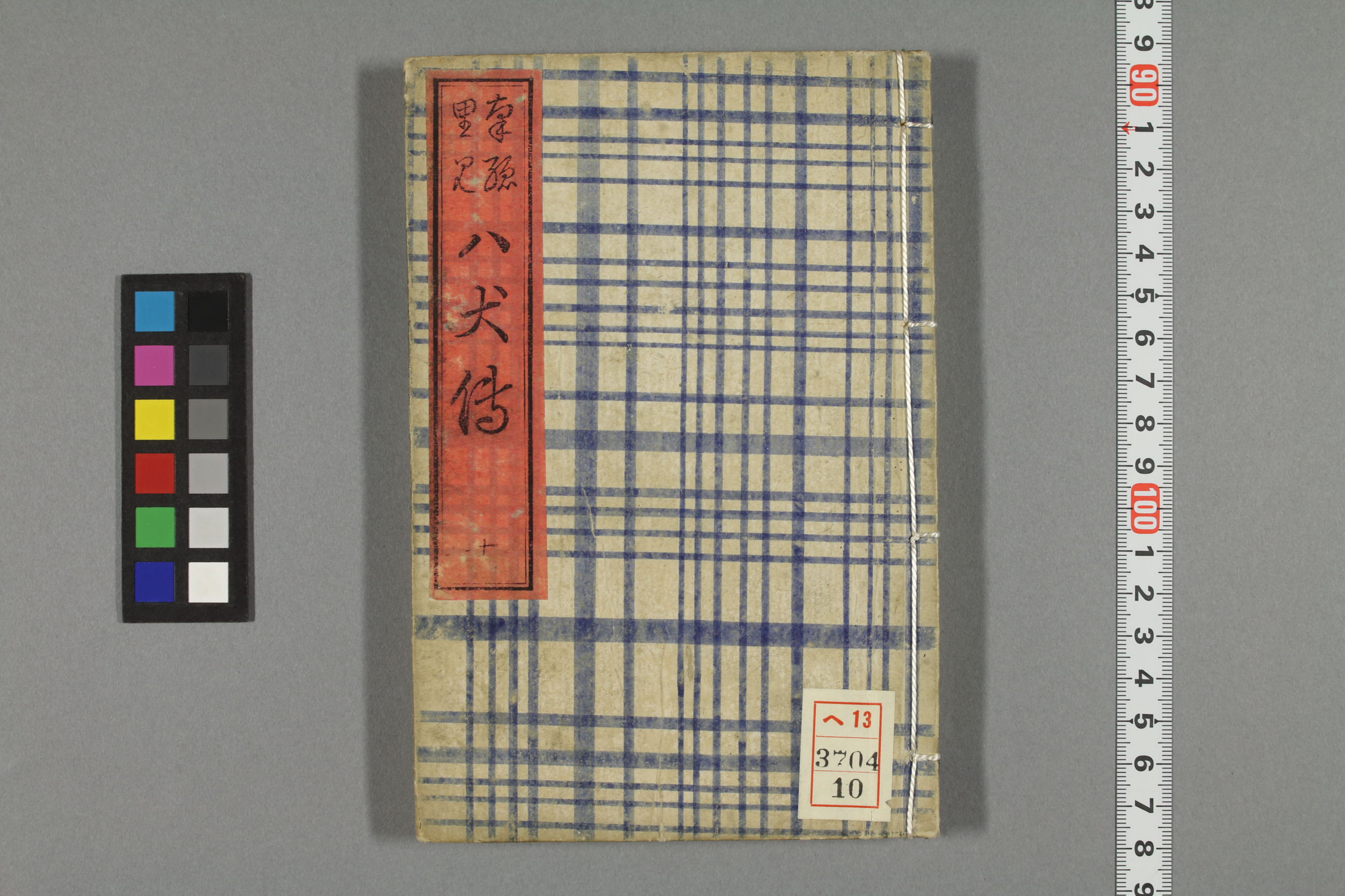

東孫里見八犬傳
十三
へ13
3704
10

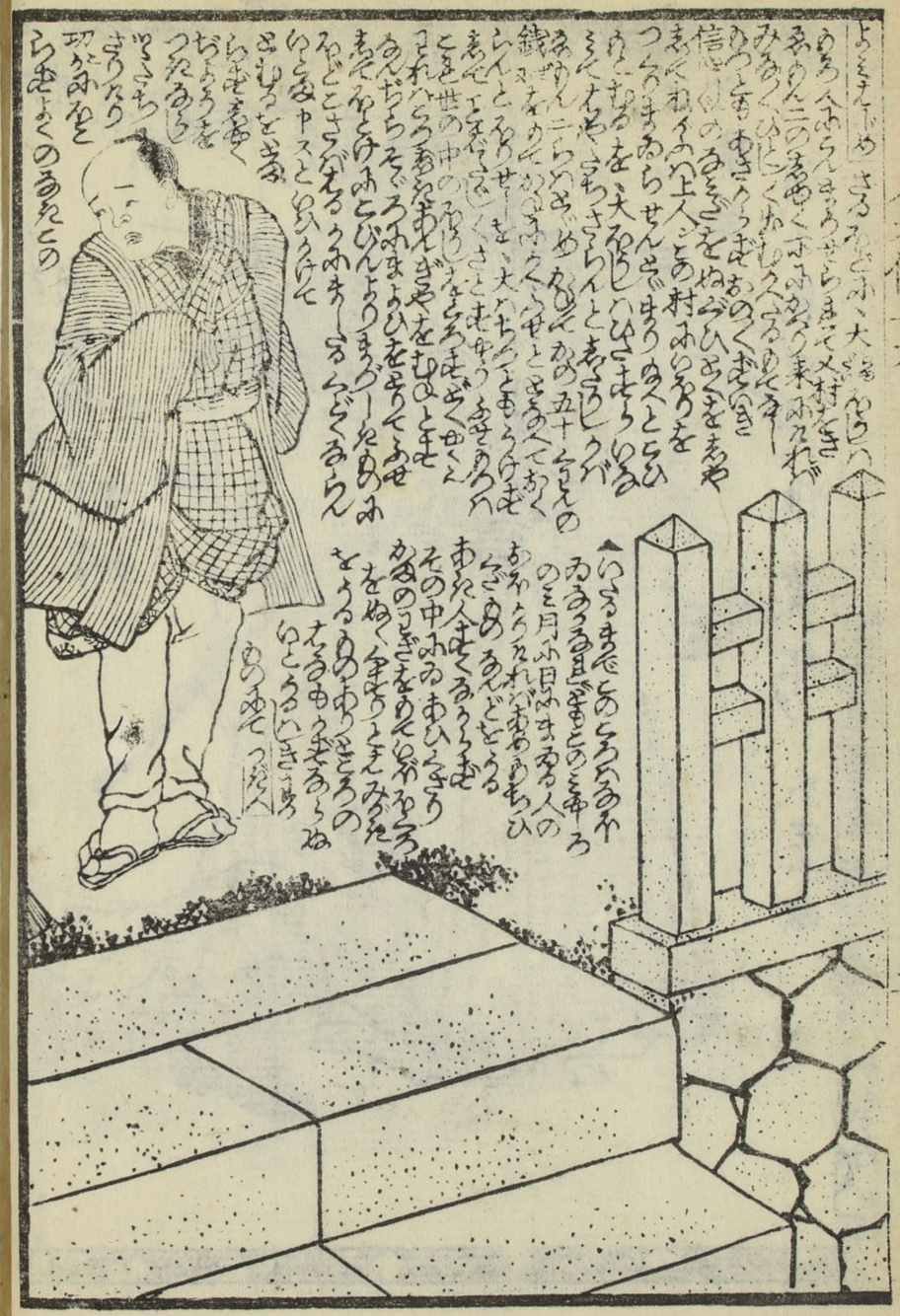
門へ13
號 3704
巻 10

本空ゝ小板元の勸ふよりて此菓子を抄錄しそよう又思へハ
唐さき上げしな玉川の水を産湯ふ浴しいの日本一の鏈を朝夕
詠ちく生育なる花の大江戸の小兒輩ハ粹の又粹酸いも甘いも
味ひて菓子を見るゆも趣向が堅し柔しと咬分玉ふ粹な
世の中所へ不粹な已等ゞ作を恍惚ふハ出されぢ瞬息の間ふ変る
流行昨日の花ハ今日の夢然ハさりながら衆位の陰ふよりて
春毎ふ緑を増る松一木かゝらぬ色ハ此菓子汲汲ゝて人
間のいろ汲見て耻しるゞら爰ハぬまでも流行の隣ぐらゐふ到
らんやうのくせく筆を急ゲて女兒樣方小兒衆多くの中へ序ら
まゐらせ敬白まつること尓り。

曲亭琴童誌

管領扇谷定正
内室鱸目上
少年新智
湯鳴の神なりけり
新泡千年
君ぞ知る
交人
松風狂題

河鯉権介守如
意馬不レ狂
心猿静
朝三暮四
惟憂レ邦
不空子題



御休處

大入十四

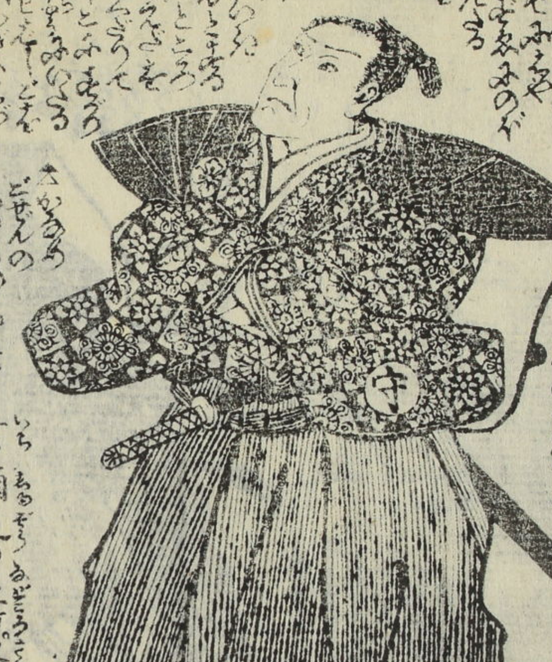
土
次

を

次

物
守

つゞき



伊丹名酒 八犬傳

月雪花みな〻ながめ酒

あらぢれハ奥薄し百薬の長

天の美禄なれ堅い

漢語なれ共實ハ

池田伊丹ハ名のみ也華

浴の隣国ゝ日本

一の酒造の名所扨又江戸ハ花といふく小説ハ

八犬傳ハ大厦高樓の内住居ハ九尺二間の裏店迄

今昔無比の大流行今世の書名ハ

八犬傳ハ名酒を新ふ弘めんとの酒中の仙家

味ひ深ひ詞のイヨ〻外々是

そこハ

なる酒

の汲

ぎ尽

太

平の

御代の惠ハ

鼓此銘酒ハ舌

得玉えつし

琴童抄錄
國芳圖画

つぎ

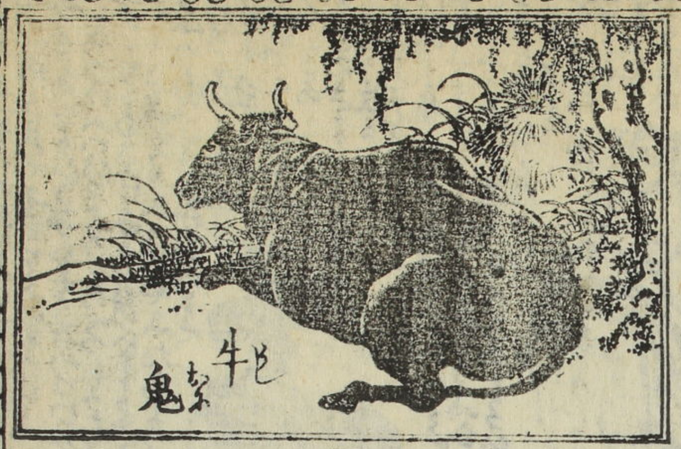
毛野のい

物
寸
道

つゞき
十五年ン
正月
廿日正月
温

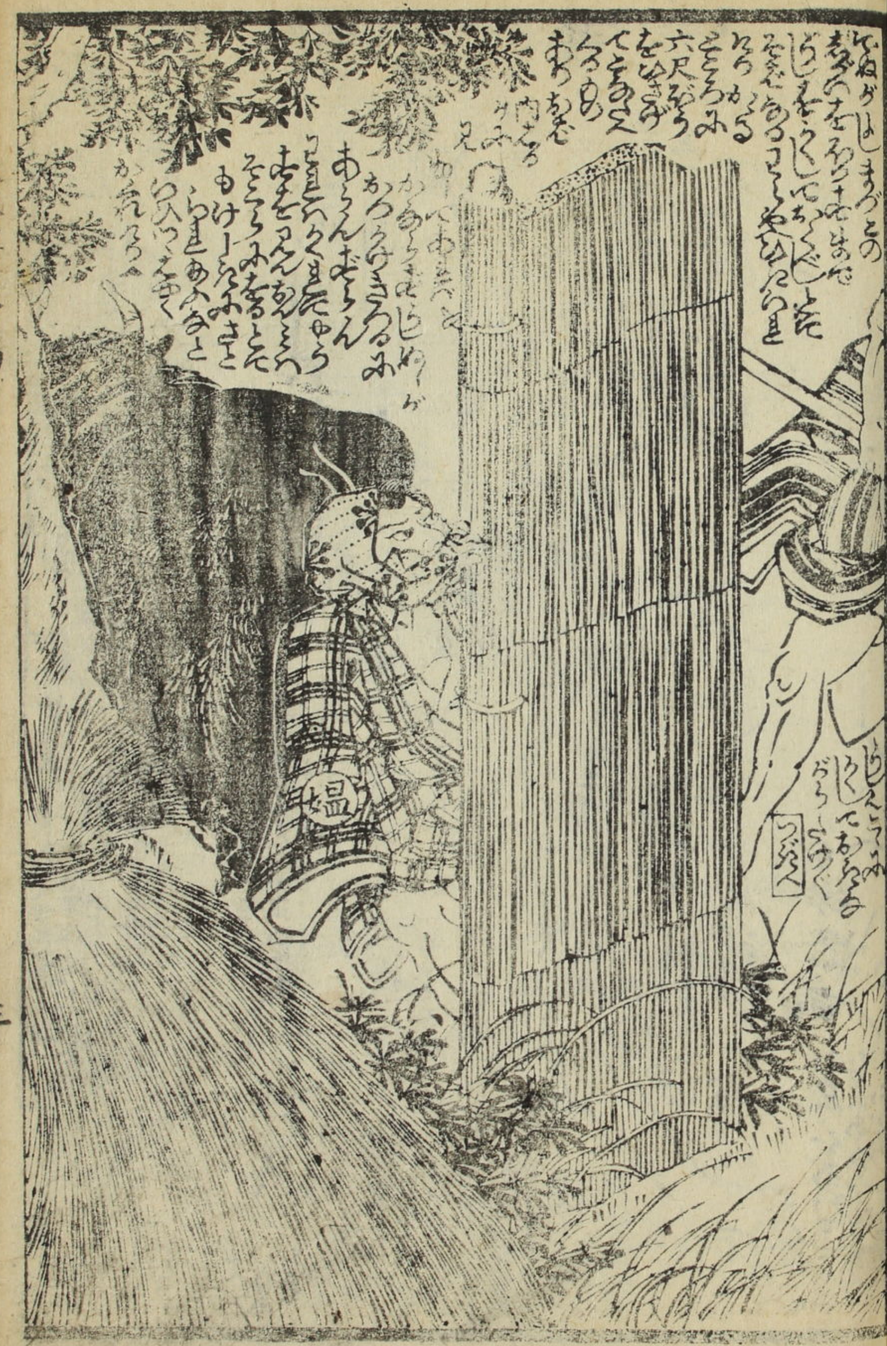
此篇殊に大老實攻伐の支多くして。婦女に賊婦船虫あるのこと。
艷麗なる段少なくに當を婦幼に取易くして。故に抄錄せるごとくも。硯に干潟とあるまでに風に帆を揚る。筆の走らねをいとはせん。しかれども方今文武の二道盛昌に臭へ。
ゆえに童蒙までも彼猥褻を。厭ふの多くあつかれば此篇軍の多きも。亦泛當でもあるまじの欲と。思ひなれば卑法の至り。本意は奬善癉惡の為とて手前勝手口から。
與院までうち開き序を半丁に述ることゝ尓り

安政五年戊午春正月吉新敗　曲亭琴童識


牛鬼

馬麻
猿
四郎鬼
妻

農夫
四郎鬼



温

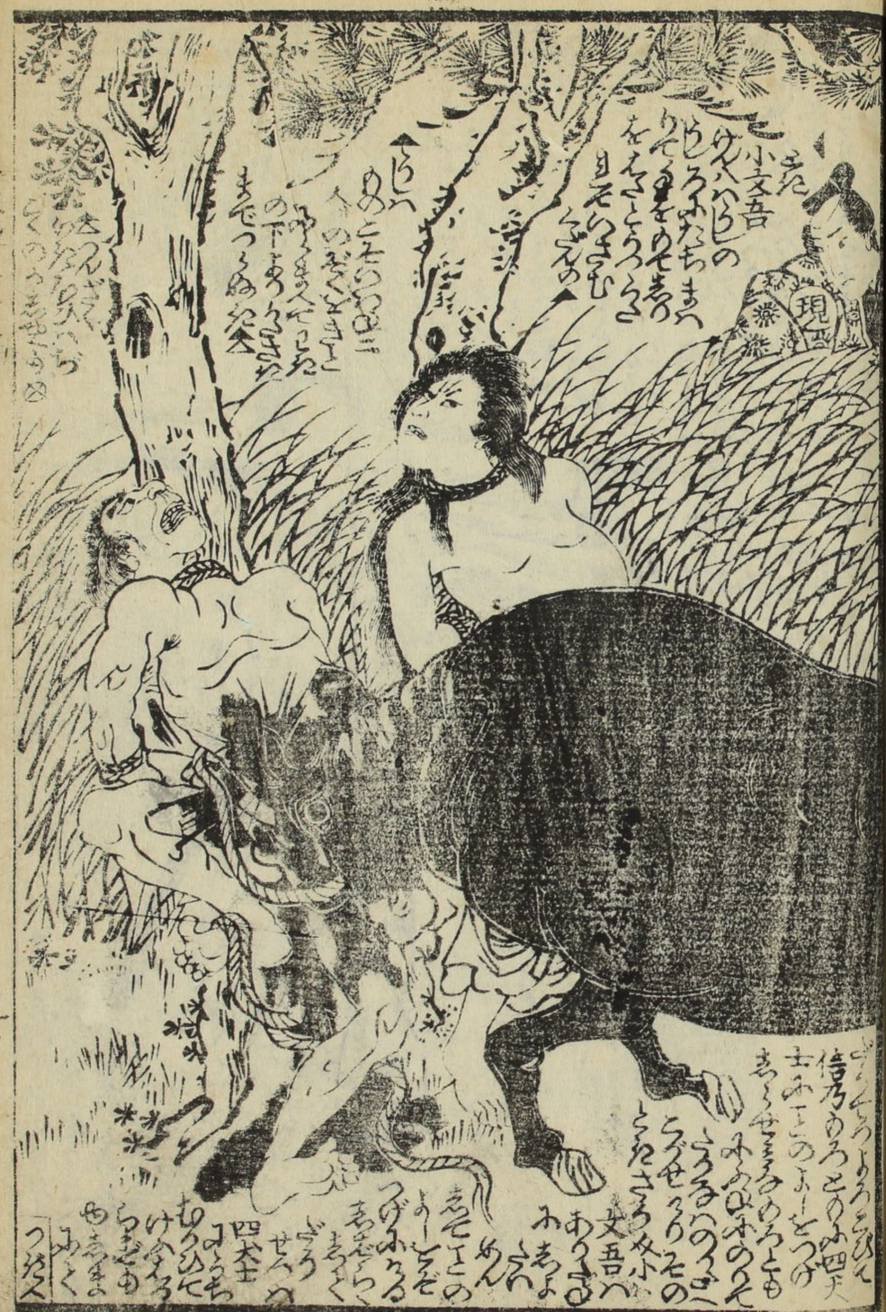
和
恵

つゞき
小
恐

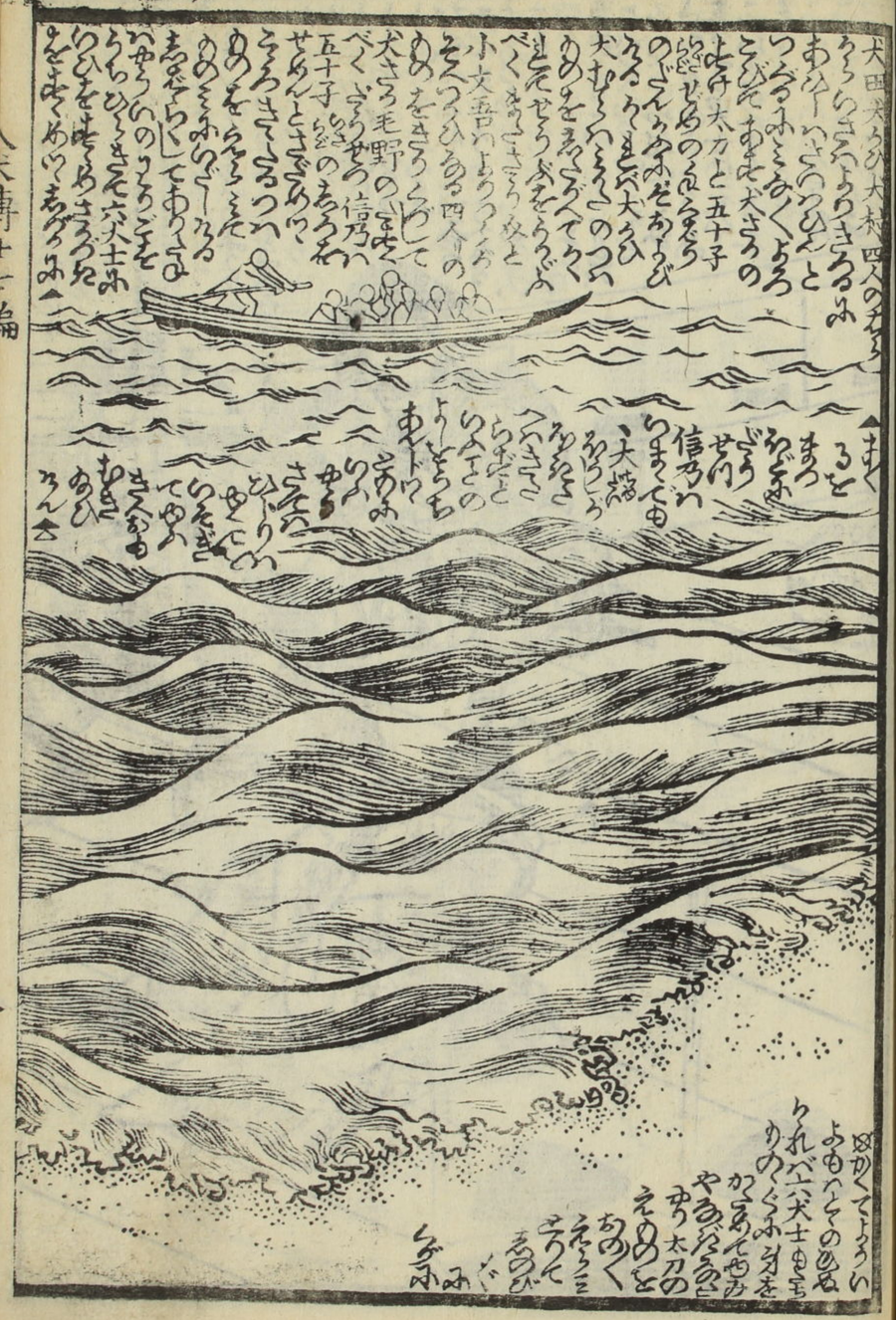
温

道

信

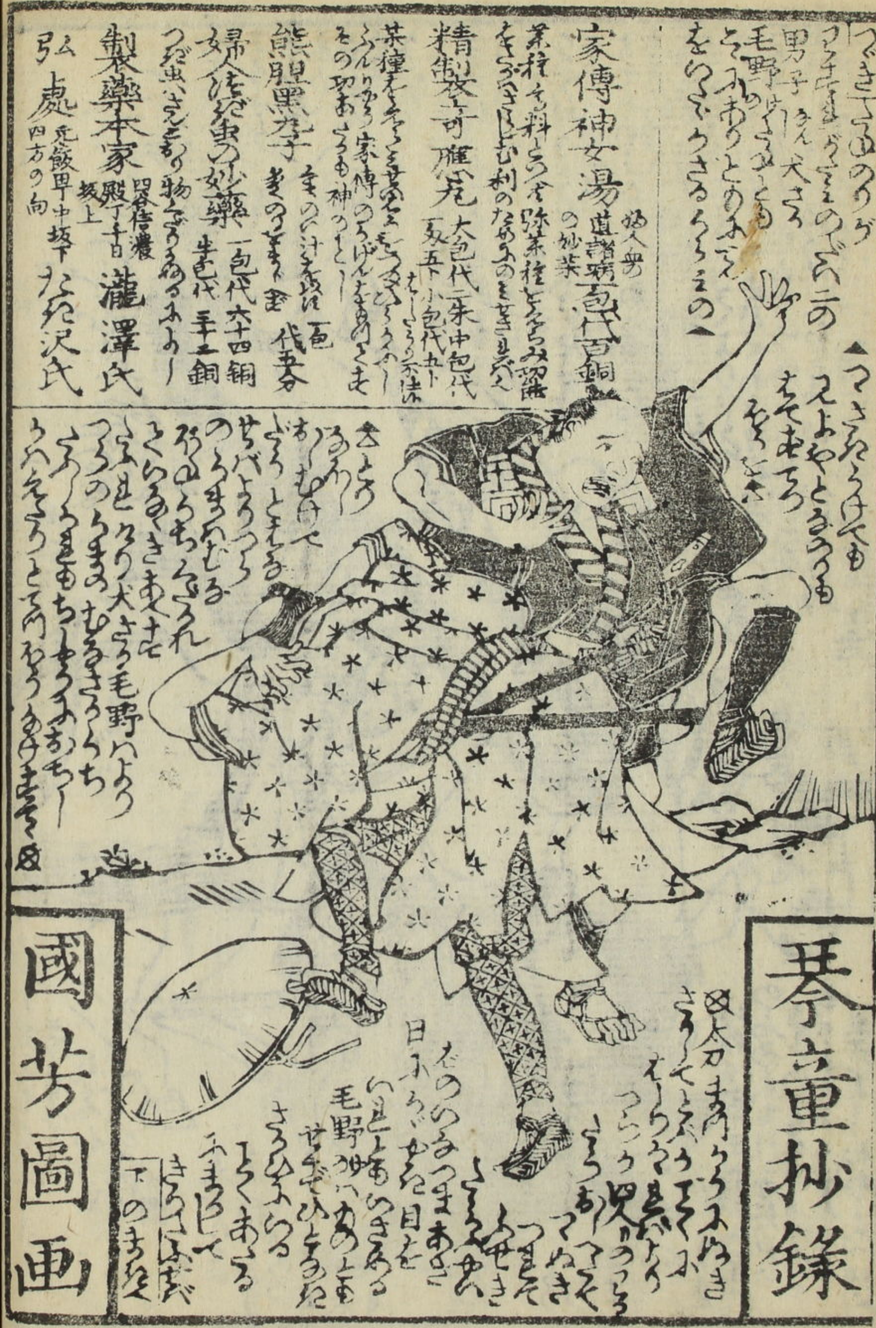

現在
小文吾
信乃
道
荘
毛

つるき
犬坂
毛野のみ
信
道



信
有

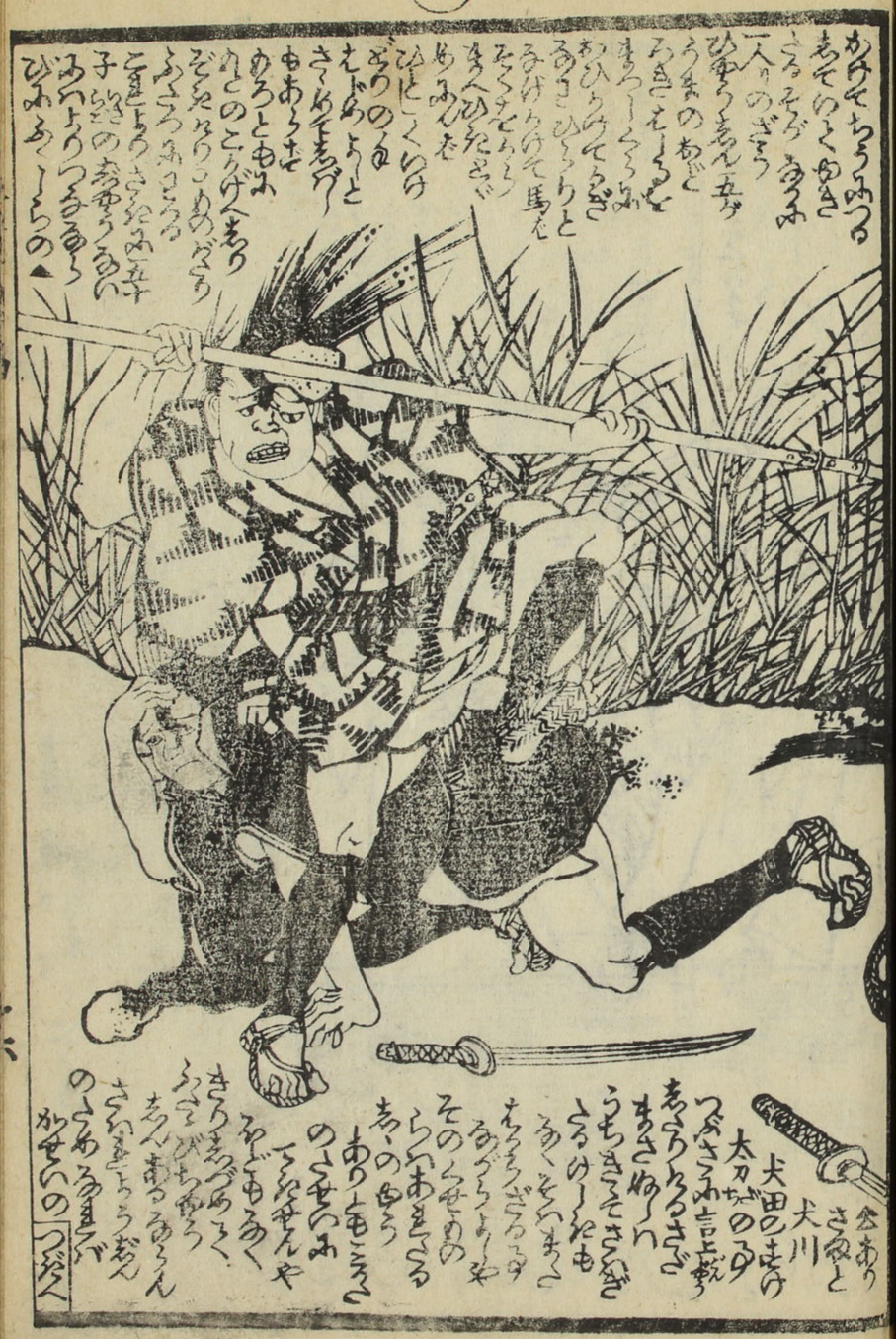
毛



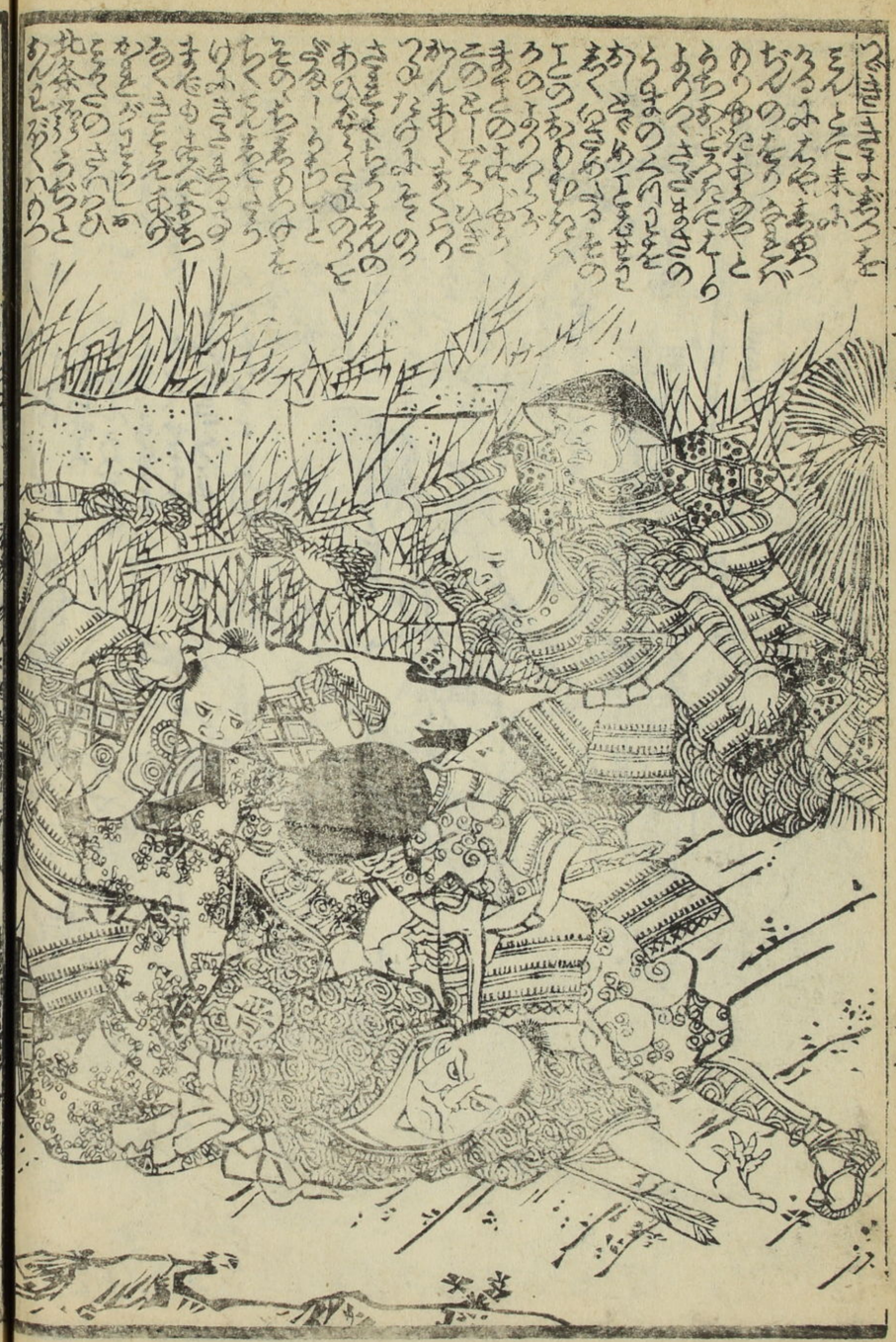
家傳神女湯 産婦用 直贈銅色代百銅 の妙薬
熊膽黑芝子 色代五分
婦人法宝の妙藥 一包代六十四銅 生色代壹十銅
製藥本家 日本信濃殿丁十日坂上 瀧澤氏
弘處 元飯田中坂下 四方の向 大沢氏

連
虎

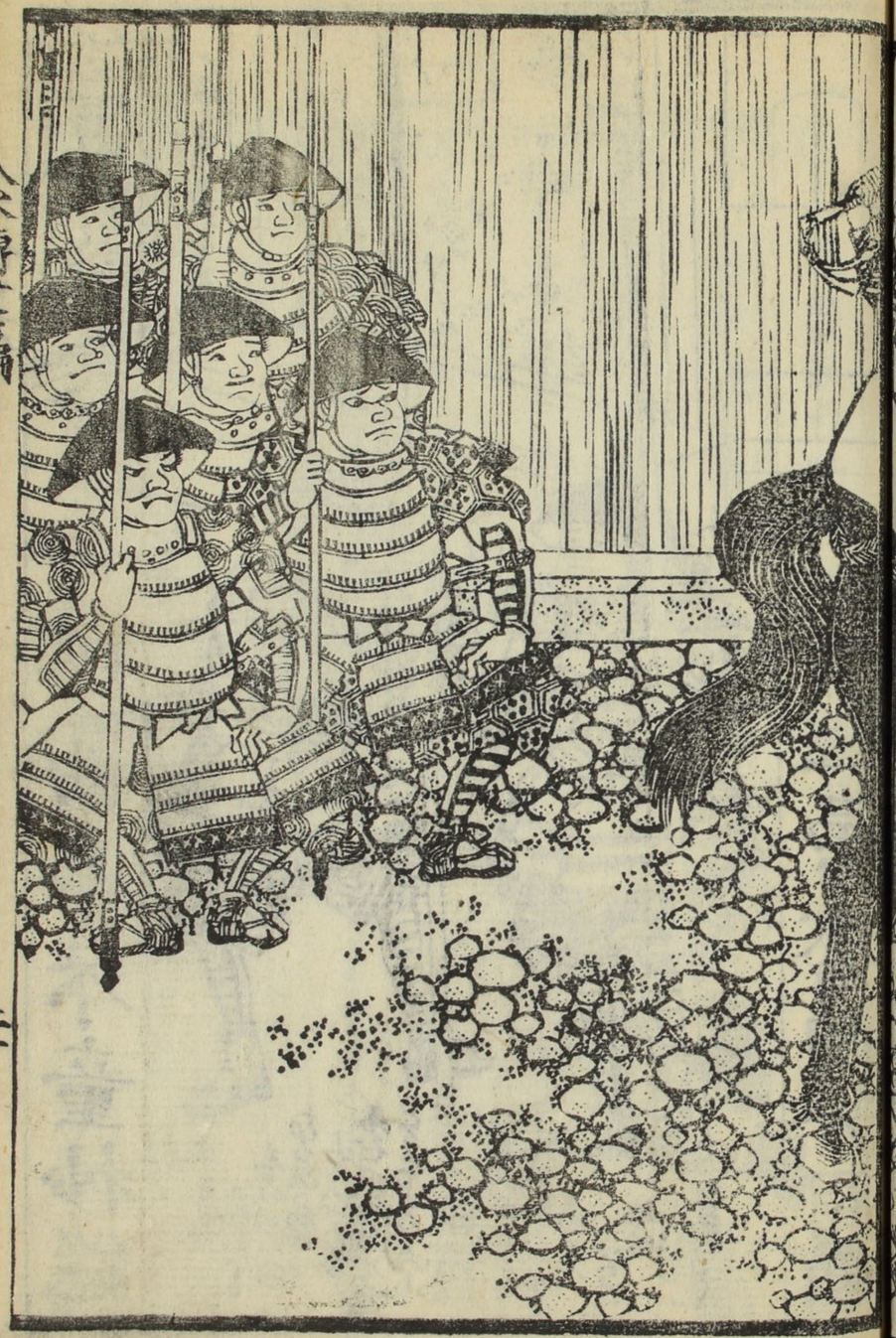
虎
毛

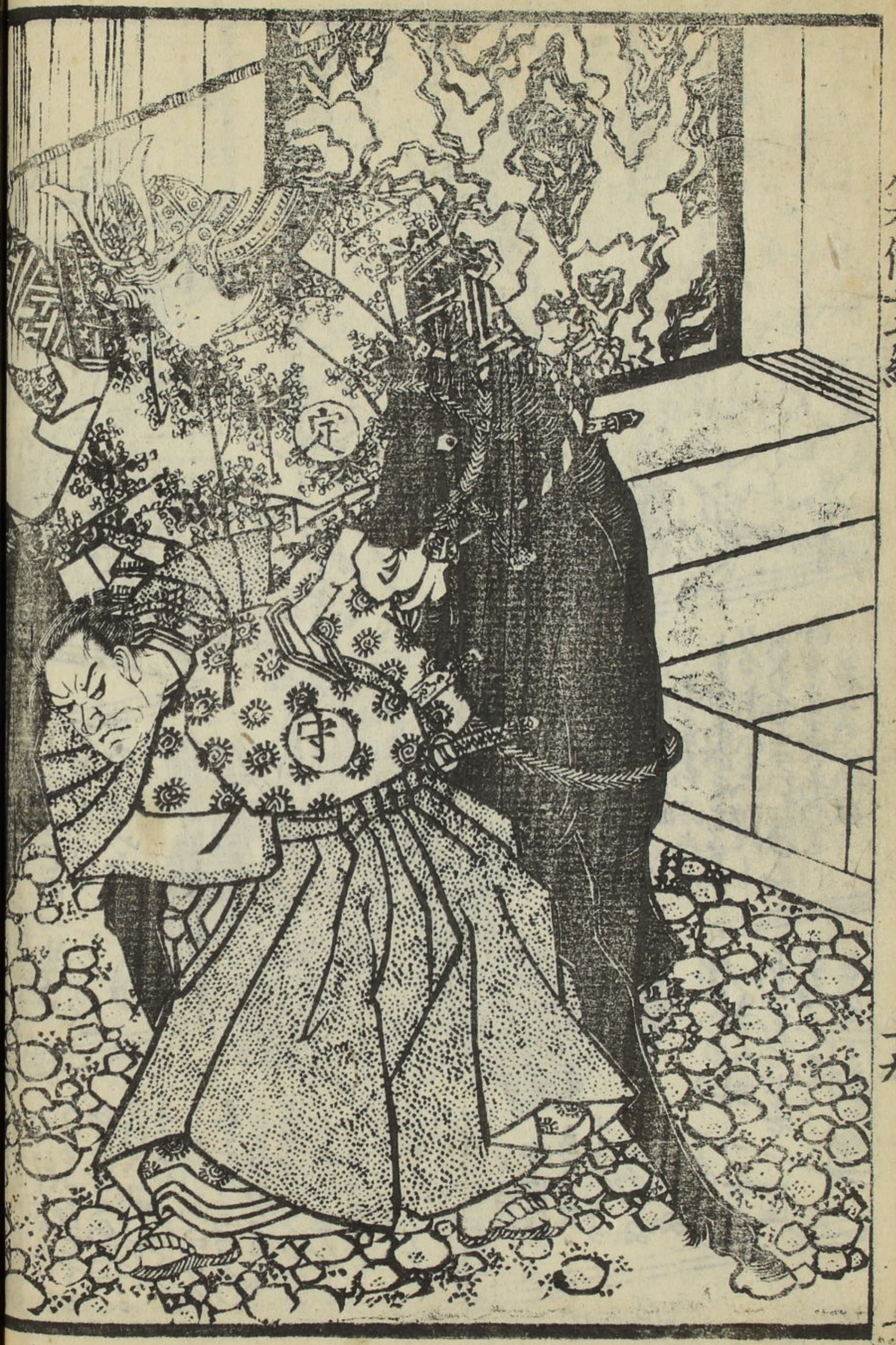


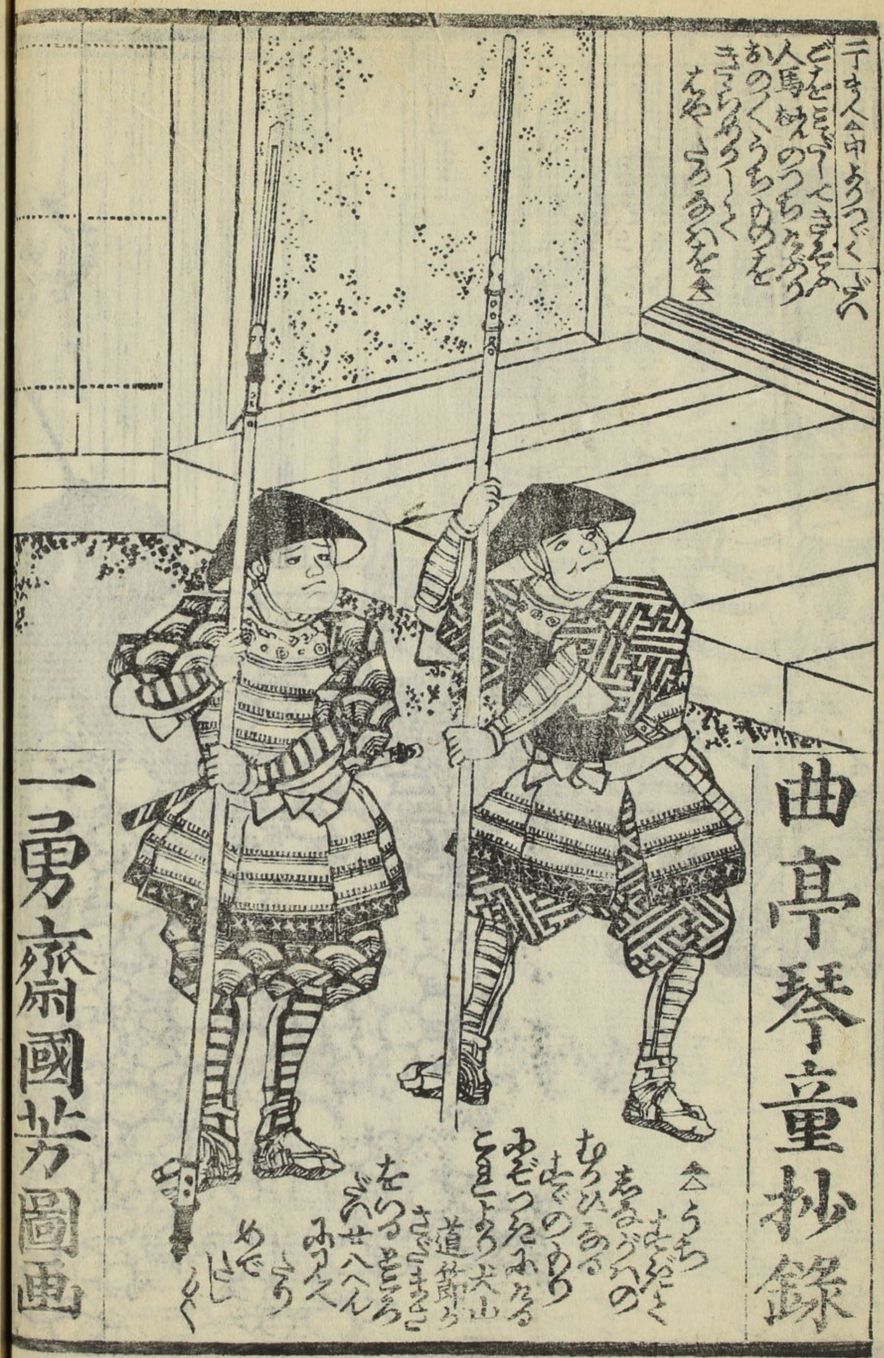
つゞき
莊
小
毛



八犬傳十七編
定







○左題畫取今昔物語載故事而爲序

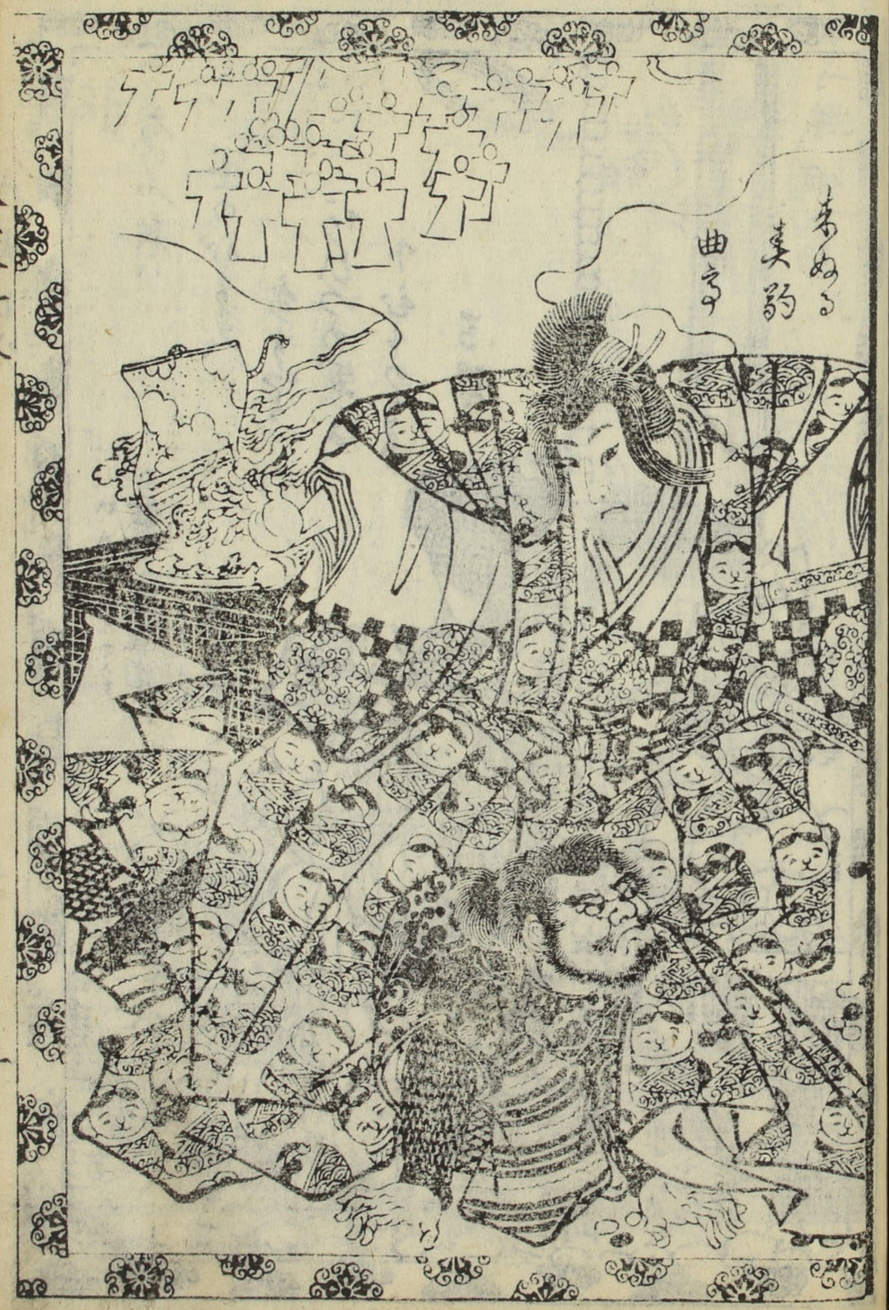
曲亭の公羽齒を呑で鼻中より。数百尋の絲を吐出し。八犬の形を織なし。綾きる文の綾錦八今昔無双の物語のそそぐ錦繡を摸せし物を假名ふとつ。其丈二丈七尺ふ及べるそう。琴童女史の手の糸きれて疾く八歳をふる狸妙椿比丘尼の話説ふ移らで。立消せんハ遺憾と看官渇望のるうを厝ふそれと菊壽堂。黄金の釜の堀出し物と求板頗る早急ふ題号ふ因む僕へ廿八犬傳來をネット兼知と編次し輕く呑こむ童蒙達お花主方注文通回々と鼻うふ絲の長物ぐう。

織止迄ル倦ぬらで。御覽の程を祈ぐおコまん　假名垣魯文

○八百比丘尼妙椿

たてこのそのの
松のホうぎのル
いきまーや
のッ足ッ

○犬江
新兵衛
仁

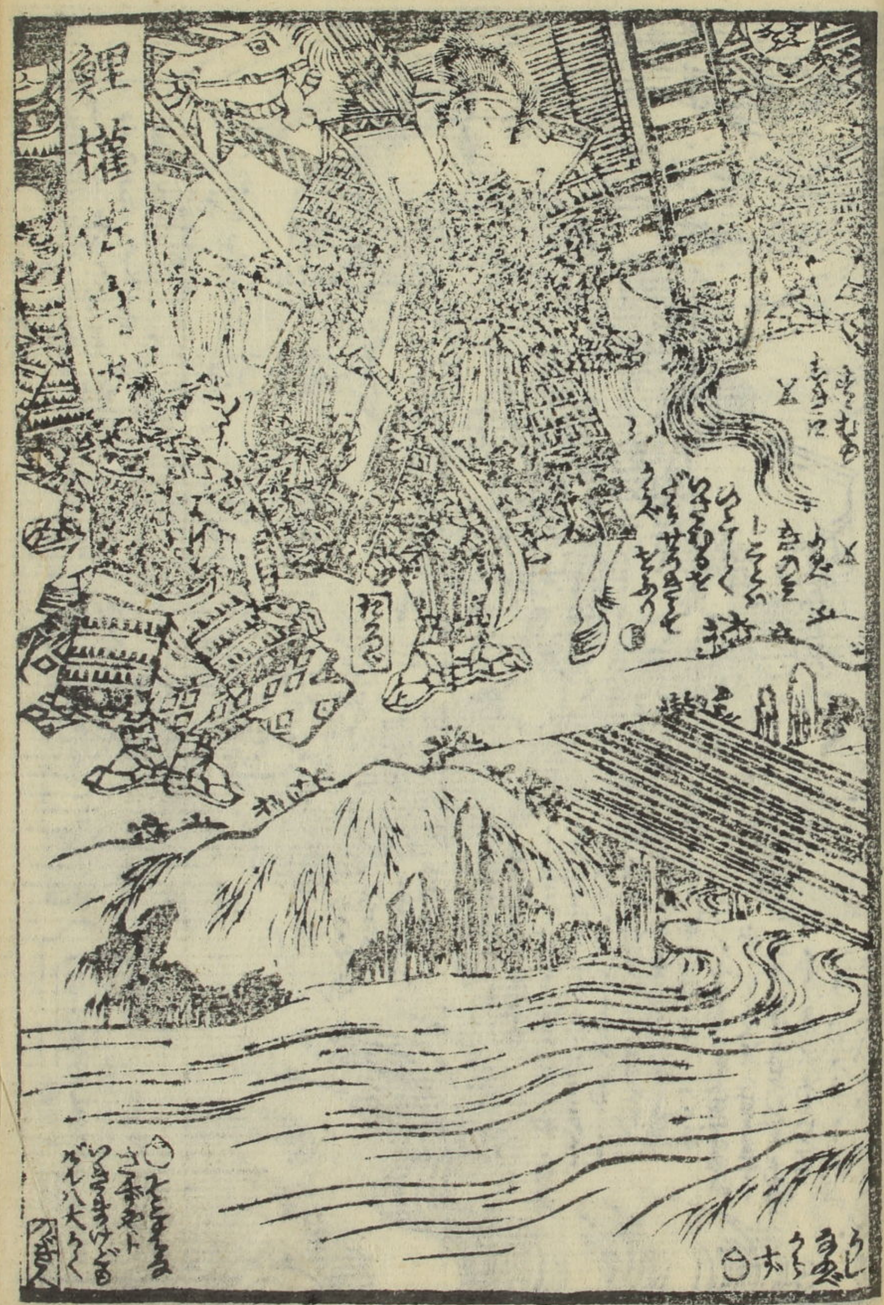


ものふ歌ハ
雲の形まさへ
あまくつ
なひひつの事よ
下ゑんのもとき
る琴
○蟇田權頭
素藤

世人編よこと和
○むろひの
ひとまのてゑあり
三四十やく
きんきりうるの
ちゑくるひきそが
▲つの
のめくぐ
らうせきあらうの
あさうのはのとやうん
えそのそらうのまる
らんとまわり
きのぶれ
とうも
きうの
むまた
▼ありるぎや
さもあふぐ
あと
○うぶ
のせう
ものふ
ものふ
あくとあのきろ
ちうまさきたい
うんこいのりあれの
つさるを
ちうひず
言ふ
ゆれ
▲
のめくぐ
のきはあらうれ
▼
▼
▼

三天士
鈴の森
ゆく
四天士ゞ
戰ひの

光景を
浦人よ
本文よ
あり

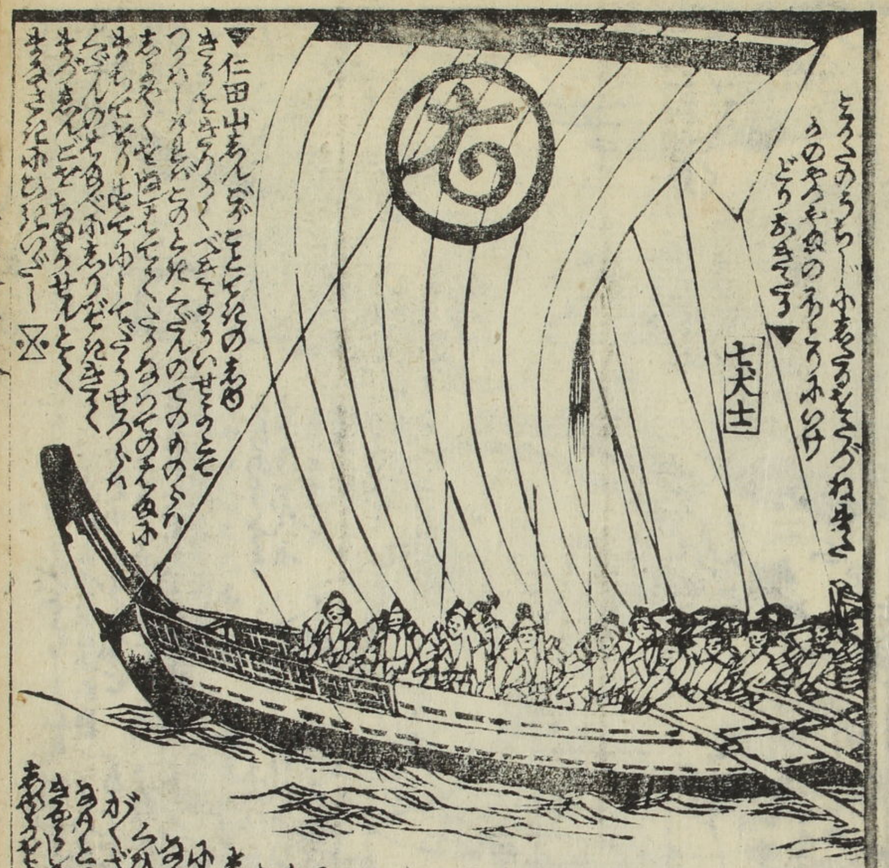

鯉權法内

魯文録 芳幾畫

扇

犬塚信乃戌孝

有馬



假名垣魚音文録

一恵齋芳幾画